

## 何をか歴史といふや：論説

著者	湯原，元一
雑誌名	龍南會雜誌
巻	3 0
ページ	6 - 1 2
発行年	1894-11-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4448">http://hdl.handle.net/2298/4448</a>

に、し、難、し、深、く、之、を、言、は、す、初、學、の、解、し、得、る、所、に、非、ず、淺、く、之、を、言、は、ば、俗、人、輕、し、く、之、を、信、じ、て、自、ら、勉、行、せ、  
ざるを恐る。仁の理は至つて大あり。之を説く鄭重ならざるべからず。之を行ふ者に於ても亦等級の不同  
と才質の高下とあり。能く此に慮らずして數々之を言ふときは惟人をして等を躡へまむるのみならず  
亦人をして之を玩ぶの心あらしめん故にこの三者は夫子の罕れに言ふ所以なり。若し然らずんば夫子  
論語に於て仁を言ふ者一再見に止らず。易六十四卦は皆利を言ひ又尤も性命の原を詳にせり。此れ何ん  
ぞや。乃ち知る罕れに言ふ者は夫子の人に教ふる親切なる處にして門人等の平日の見る所に就きて而  
まて之を類記せし者なることを。

## 何をか歴史といふや

講師 湯 原 元 一

歴史といへるこの意義は、古來幾多の變遷をあし來たり。今其の變遷の跡を考へて、之を大別すれ  
ば、叙説を主とするもの、利用を主とするもの、及び發達の講究を主とするものとの三者となすこと  
を得べし。而して其時代の前後をいへば、叙説を主とするもの、初めて出て、利用を主とするもの、之  
に次ぎ、發達の講究を主とするもの、又之に次ぎて起れり。

第一、叙説を主とする時代に於ては、人々只その耳目に珍らかざることを知らんと欲するのみにて、  
他に何の目的もあかりき。是れ恰も、幼兒が、於伽草紙の中なる物語をきゝて喜ぶと一般、まこと無邪  
氣の沙汰とやいはん。西洋にては、希臘羅馬の往時に行はれたる諸ろの勇將談の如きは、其の著しき  
例にて、我邦にては、稷田阿禮が口誦したりといへる、古事記中の事實の如きは、其の幾分は、もとは  
この類あるべし。延喜式に載する出雲神壽の如きは、上古、語部かたりべにて、語り傳へ、言ひ繼きたりといへ

ば、我邦の昔にも、希臘の祝祭日に行はれたる物語類の、同じく行はれたる様を想ひしるべし。右の中にも、永く事蹟を後の世に傳へんが爲めに、稀には之を文にしたるものとあらず、金石に刻みたるものあり。こは希臘羅馬の昔のみならず、東亞細亞の國々には、尤も多かりし。古人が蒐集しをける、金石文集などをみれば、我邦にも、この事早くより行はれし跡あり。されども、これも特別ある目的にかゝへんが爲めに、ことある注意を加へて、事實の取捨とあしたりとも見へざれば、矢張り此段の歴史の部類に入るべし。

第三、利用を主とする時代よりは、歴史家の目的は、歴史を以て、世の利益を計るの便に供するにあつた。中にもこれを以て、世人を教化するの具とあすにあり。執政者の參考に、制度法律に關する記録を留むるはいふまでもなし。英雄豪傑の傳記を著はして、これによりて、年少子弟の忠君愛國等の如き、國家に對する道徳を養成せしが如きは、東西、孰れも同じく、其の事あり。希臘の歴史家ヘロドトの如き、ツキデデスの如き、何れもかゝる主意にて歴史を書き、希臘羅馬の歴史家プルケイウスが英雄傳の著出づるに及びては、此種の歴史は、尤も完成の域に進めり。シセロの語にいへることあり、「歴史は、人の智を明にし、人の情を高くし、人の意を勵まし、人を導きて、美はしき目的に達せしむ」と、支那は其の昔、孔子が董狐が直筆をたゞし以來、學者、何れも歴史を以て、勸善懲惡の一具とあさるはあき。子夏が詩の序に、「國史明乎是非之迹」といへるを始めとし、此意を敷衍せる議論はいとも多し、皮日休は「經之降者莫過乎史」といひき。我邦も、儒教傳來のふのかたは、其の教の盛なりし時代よりは、歴史家は、何れも孔子の遺意を奉じ、歴史の意義は、専ら利用に傾き、歴史を以て、六經の習翼となすの說の一行はきて、維新の前後に及べり。續日本後記の序は「史官記事。常王之跡、興、祠典

序言。得失之論對出。憲章稽古。設阻勸。而備遠圖。貽鑒將來。存變通。而垂不朽者也。』といへるは、此説の全豹を知るの一斑あるべし。特に我國柄の事として、後の世の人に、天日嗣のいとも尊きゆゑよしを知らしめんとて、専ら天皇の御事蹟のみを、主とまで記せるもの多かり。六國史など、官府の手に成りたるはいふまでもなし、其のつきく、世にあらはれたる歴史にも、此類多し。古事記の作は、當時の朝廷の意には満たざりとも、安麿が序をみれば、こまも此主意にて、撰ばれたるものと明し。北畠准后が神皇正統記を著はされまゝは、誰も能く知ることながら、尙茲にうが緒論中の一節を援くべし、『神明のことは、たやすく顯はすといふことあれど、根元を知らざれば、みだりがはまき端ともありぬべし。そのついへをすくはんため、いさゝかしるし侍り。神代より、正理にて受傳へるいはれを宜んふとをしるして、常にきこゆることはのせず、しかれば、神皇正統記とや名づけはべるべき、』これにて、其の全体を推すべし。

叙説を主とする歴史は、事實をば、ありのまゝに叙述するものなれば、學術の位置より見れば、幼稚の程度にあれども、之に伴ふ弊害は少し。しかのみならず、歴史の材料としては、あまゝかに偏見を加へて、本來の面目を失ひたるものよりは、却りて、いともたふとし。されども、これを以て、歴史の本分を盡したりと思ふは、ひが事あり。ランケが『歴史の職掌は、獨り客觀的に材料を整理するのみにあらず』と、いへるは、知言あり。利用を主とする歴史は、其の目的にころ、大なる效力あるも、若し一旦之を誤用するときは、其の弊害は、なか／＼に恐るべきものあり。其の故は、此種の歴史にては、豫め一定の働因を定め、總ての事實は、此働因の發動としてかきしるすが故に、他の働因を看過し、隨ひて事實の真相を狂むるの例少からず、例へば、古來我邦の歴史家が、平重盛を以て、忠孝兩全の人

と云し、重盛が一代の行爲は、大どなく小どなく、悉く此忠孝の發動あるが如くに論ずるは、他の働因を看過せるものあり。又其の足利尊氏を以て、暴逆無道の大惡漢と云し、務めて其の證左とあるべき行爲を擧ぐるは、事實の真相を枉げたるものあり。要するに、或る一定の目的を抱きて、歴史をかくときは、其の目的に合ふものは、成るべく多からんことを欲し、之に合はざるものは、成るべく少からんことを欲し、材料の取捨に、公平を失ふことを免れず。因りて惟ふに、准后の正統記も、若し正潤位の争を決めんがために善はさすずば、必ず他に注意すべきことも多かりしならん。義公の日本史も、若し大義名分を明にせんが爲めに撰ばれずば、必ず他に着目すべきことも多かりしならん。其の他六國史を始めとし、歴代公私の歴史も、或るかたよれる目的を以て、世に出ですば、必ず他にも顧みる所のもの、あか／＼に多かりしならん。然るに、さなかりきは、我邦の歴史が、永く儒教の奴とあり、利用の範圍外に獨立すること能はざりし所以とあるべき。

近頃歴史研究のこと、追々に盛なるに隨ひ、古風の學者中にも、西洋の研究法などを、をぼろげながらも、聞知り、歴史の獨立を圖るものあり。こは我學術の進運の爲めに、喜ぶべきことあるも、これと共に、所謂抹殺といへる、いといまはしき顯象を生ぜり。所謂抹殺にして、まことに能く、慥かなる證據に基き、嚴かある研究の法によりたらんには、如何にいとをしき忠臣義士たりども、之を正史の中より割愛し去るに、何の未練あるべき。ブイスの國史に名高き、ウヰルレヤム、デルが事蹟は、研究の結果にて、今は尋常の傳説とされるも、ボウスの國家は、これが爲めに、おにらの損失を蒙るは、能く人の知る所あり、されば、若しこれとても咎むるものあらば、これぞ學術の獨立を防ぐのみならず、未だ眞の歴史といへるものを知らざるものあり。されども、事此に出ですして、若し徒に異論を唱

へて、俗耳を驚かまゝ、一時の虚名を博せんとすることよめらば、是れぞ獨り史學の罪人あるのみならず、實に世道人心の罪人といふべし。曾て某氏が菅丞相は、如何ある人ぞと題して、某雜誌に掲げた論文を讀みたるに、其の意、『公は文才の士にて、政治家にあらず、日本史に公を賛する語は、全記者の臆断に出で、一も出處なきあり』とあり。之を讀みて、如何にも断案の輕忽あるに驚き、聊か其の証左を擧げて、其の誤りを正せたることあり。されども、此類の抹殺は、其の罪つくりの程も、いと輕き。彼の世にも名高き、兒嶋高德の抹殺論などころ、實に今日の如く、是非の間に防隘せまむべからざるの問題あり。又曾て、抹殺論の反對者ときこへたる某氏に面々、談歴史に及びたるに、氏は頻りに抹殺の非あることを論じ、『支那は、革命の國あれば、革命毎に、幾多の忠臣義士を出えたるも、我邦の厄運は、南北朝に時に限るが故に、兒嶋高德を抹殺するが如きは、是れ我邦の忠臣義士の標本を失ふ所以なり』といへり。これらの議論、歴史の利用に偏する儒者流の見解にて、歴史家とては、いふまじきことあり。要するに、今日よ於ては、抹殺論者も、口にくろ、史學の獨立をいへるも、歴史をば、己が好奇の心の爲めに、利用するものも少からず。又之に反對するものも、眞に慥かある據る所のものありて、意見を異にするにはあらで、偏に彼の忠臣義士を失ふことを恐るの感情よりして、他を咎むるものも多き。されば、一は好奇の爲めにし、一は感情の爲めにするの差いこそあれ、其の科學としての歴史の大成に望みあきしは同じ。

第三、發達の講究を主とする時代に至れば、歴史家は、單に事實の叙説をあすのみならず、又單に其の己が目的に利益ある方面のこを利用することあらず、茲に至れば、歴史家は、更に一步を進めて、材料を材料其のものとて、其の性質を考察し、如何にまて、某の歴史的現象は生じ、如何なる事實の

交互作用によりて、某の歴史的顯象を生ずるに至りしやを講究す。而て歴史は、こゝに始めて、一個の科學となれり。

させば、今日歐洲著名の歴史家は、皆これを以て、歴史の本体とあさいるはなく、彼の獨乙の史學社會に鏘々たる、ランケ、シーベル、ドロイゼン、ワイツ等の如きは、其の中にも、尤も顯著なる此論の主張者あり。ギーゼンヒトは曰く、『人々各國民の離合の關係に於て、則ち其の發達に於て、人間の生活を理解するを以て、最高目的とあすは、現今歴史の性質あり』と。然れども、歴史の意義の進みてこゝに至りしは、前には諸の必要の觀念、先づ人間の心意に發生して、之れが準備をあさいるべからず。今日まで、東西の歴史が彼の如き狀態に止まりしは、全く此必要ある觀念の欠けて備はらざりしが爲めなりき。いはゆる必要の觀念とはいかに。

甲、は人間は、總て相互に内界の聯絡を有し、集まりて一全体をあすといへることの觀念あり。この觀念は、實に古人に缺けたり。ニッペルデイの言よ、『歴史の材料に限りありたるが故に上古に於ては、一全体としての歴史の理解は、六ヶしかりき』とあり。希臘の昔に於ては、最も外國との關係に注目せる歴史家といへど、尙之を化外の民と稱し、全く度外とをけり。當時にいはゆる普通歴史は、希臘羅馬の歴史なりき。支那の往時はいふまでもなく、九夷八蠻とぞいへば、固より人道を以て論すべきものども聞へざりき。獨り我邦の上古史のみは、聊う外國との交渉にも注意したりと、天然の地理三韓との關係を密にせしによるべし。ささども、これも交渉の事實を擧げたるまでにて、發達的など、學術めきて講究したるにはあらず。うくの如く東西ともに、昔時は、自國の外ある他の諸國民の歴史ども、并せて比較講究することをあさいうき。隨ひて、當時の歴史家は、人間といへるものを、測定すべき尺度

を。缺。ぎ。一。般。人。間。の。心。意。は。如。何。あ。る。も。の。あ。る。や。を。理。會。す。る。こ。と。能。は。ず。只。僅。か。う。已。が。心。又。は。已。が。政。治。宗。教。學。術。さ。て。は。生。活。を。こ。に。關。す。る。見。解。を。以。て。他。は。時。と。處。と。に。よ。り。く。さ。く。に。異。あ。れ。る。事。情。を。推。度。す。る。に。過。ぎ。ざ。り。き。さ。れ。ば。其。の。議。論。に。偏。頗。の。沙。汰。の。み。多。か。り。し。も。自。か。ら。免。れ。難。き。大。第。と。や。い。は。ん。歐。洲。に。て。歴。史。家。の。着。眼。漸。く。か。ゝる。究。屈。な。る。境。界。を。脱。せ。し。は。實。に。耶。蘇。教。傳。布。の。後。に。あ。り。こ。れ。は。さ。も。あ。る。べ。し。其。の。故。は。耶。蘇。教。よ。り。見。れ。ば。凡。て。人。間。と。い。へ。る。も。の。は。皆。罪。業。救。濟。審。判。を。こ。い。へ。る。諸。ろ。の。運。命。を。共。有。す。る。も。の。に。て。又。天。帝。の。眼。前。よ。於。て。は。貴。賤。貧。富。を。問。は。ず。同。一。の。も。の。と。さ。れ。ば。あ。り。か。く。の。如。く。耶。蘇。教。は。人。間。の。中。に。限。界。を。立。て。ざ。る。が。故。に。此。思。想。に。て。支。配。せ。ら。れ。た。る。歐。州。中。古。の。歴。史。は。其。の。幾。多。の。缺。點。あ。る。に。も。拘。は。ら。ず。獨。り。此。點。よ。於。て。の。み。は。遙。か。に。彼。の。古。代。希。臘。羅。馬。の。著作。に。優。れ。り。さ。れ。ど。も。固。より。宗。教。の。一。方。面。よ。り。觀。察。し。た。る。こ。と。と。れ。ば。自。か。ら。其。の。方。面。に。の。み。偏。し。其。の。弊。は。中。々。に。緊。切。あ。る。事。件。も。俗。世。界。の。こ。と。と。て。重。く。は。之。を。視。ざ。る。こ。と。ど。も。多。し。今。其。の。一。例。を。舉。げ。て。い。は。ん。に。當。時。の。歴。史。家。は。時。代。を。區。分。し。て。耶。蘇。の。誕。生。よ。り。以。來。を。一。期。と。あ。し。之。を。耶。蘇。教。以。前。の。時。代。よ。り。區。別。し。専。ら。重。き。を。此。に。置。き。以。て。其。の。体。を。あ。せ。り。か。ゝる。事。は。今。日。よ。り。見。れ。ば。こ。ろ。怪。み。も。す。れ。ど。も。元。來。當。時。の。人。の。眼。中。に。て。希。臘。羅。馬。を。こ。い。へ。る。も。一。種。の。非。耶。蘇。教。徒。な。れ。ば。其。が。盛。衰。興。亡。な。ど。を。こ。と。く。し。く。論。ず。る。は。耶。蘇。教。徒。の。面。目。に。も。か。ゝる。こ。と。と。り。し。あ。る。べ。し。こ。れ。を。思。へ。ば。當。時。に。こ。ゝる。失。体。の。歴。史。あ。り。え。は。決。し。て。無。理。を。ら。ぬ。こ。と。と。い。ふ。べ。か。ら。ん。

(未完)

因にいふ、本稿の主旨は、歴史を純正の學科として論じ、之を教育に應用する上より、意見を立てたるにあらざれば、讀者も希くは、其の心して、是非せられたし。尙次稿には、歴史の定義、及び歴史と歴史哲學との係關に論じ及ぼすべし。